

演題名：外来診療における成人百日咳の経験

コウツ ヒト
演者名： 神津 仁、

所属：神津内科クリニック

20歳以上の百日咳患者の率が2000年は2.2%でしたが、2007-8年には36.5%を占めました。過去9年で最多といわれた成人患者ですが、感染症サーベイランスに載る定点観測医療機関は小児科のみであり、臨床内科医による報告は少ないようです。

今回我々は「治りにくい咳」で初診した患者21例の臨床像、および、この中で診断された「成人百日咳」患者の頻度、またその臨床上の特徴は何かを検討したので報告いたします。

最初に、2007年冬から2008年春の間、7日以上普段より咳が長引いてつらいという外来患者11名(女6、男5)について検討しました。

次いで、マスコミ報道などにより患者の関心が高まり、最終的には21例(男8例、女13例)をエントリー患者とし、臨床所見、血清学的検査、治療経過の検討を行いました。

これが21例全例を載せた表です。黄色の部分が百日咳と診断されたものです。最下段に健康成人のデータを示します。

症例を提示いたします。48歳の主婦。

主訴は、1週間前から咳が出て止まらないということです。

現病歴ですが、受診する10日前にロサンゼルスから飛行機で帰郷。この時の機内の後部座席に、「コンコン」というひどい咳をした子供がいたとのこと。熱発はありませんでした。現症ですが、咽頭発赤が軽度。胸背部にてcrepitant raleが軽度あり、マイコプラズマまたは百日咳感染を疑って検査をいたしました。表記の処方にて、約2週間でほぼ完治しました。

検査結果では東浜株が1280 倍と高値を示しました。

21例についてのまとめです。

- ・ 平均年齢は47.5歳(15～80歳)
- ・ 咳の出現から受診するまでの期間は平均9.2日(7～25日)でした。
- ・ 咳の性状は、かぜ症候群の咳と区別が付きにくいものでした。
- ・ 白血球数の平均値は7738 (4200～22900)

・九州大学の血清学的診断基準「山口株対東浜株の比率が山/東>4倍、または単血清による凝集素価320倍以上」に準拠した場合、「百日咳」と診断するに足る症例は10例(47.6%)でした。

・家族歴は殆どありませんでした。

・全経過の平均は23.6日(7~60日)でした。

これらのデータは、一週間以上続く「治りにくい咳」の患者の臨床所見です。これらの中から百日咳の血清学的診断をつけた10例についてまとめてみました。

これが百日咳患者10例のデータです。

男女比は、3:7で女性に2.3倍多く見られました。平均年齢は45.4歳。受診までの期間は平均7.4日、WBC数の平均は7960、全経過は平均22.2日、症状については他の「治りにくい咳」の患者と変わりなく、かぜ症候群の咳と区別が付きにくいものでした。

世界では年間患者数2000~4000万人といわれ、その死亡者数は20~40万人と、今でも公衆衛生学的な脅威を与えている感染症です。90%が発展途上国の乳幼児でワクチン未接種児といわれていますが、米国では1980年代から患者数が増加、特に10歳代と成人の患者が増加しているようです。

日本でも、1982年以降減少していた患者数が、2004年に増加に転じました。特に2000年には2.2%と少なかった20歳以上の患者が、2008年に36.5%と大幅に増加に転じています。

これは九州大学国立病院機構福岡病院のデータですが、乳幼児のピークと、20歳から50歳までの成人と、二つのピークがあるのがわかります。

このように、成人百日咳が増加している現状については、百日咳菌の遺伝子変異によるワクチン効果の減少、幼小児期に接種されたワクチンによって獲得された抗体価の減衰、臨床症状が非典型的で、そのために気付かれないうちに感染源となる、などの問題点が指摘されています。今後は、このような成人百日咳の病態をよく理解して、早期に適切な診断・治療が必要と考えます。

本研究のまとめをお示しいたします。

- 1 2007年から2008年の冬、一週間以上長引く「治りにくい咳」を訴える成人患者21例について、その臨床的な特徴を整理した。
- 2 これらの患者のうち10例(47.6%)が百日咳と診断され、その率は高かった。
- 3 これら成人百日咳患者の臨床像は以下の如くである。男女比は、3:7で女性に2.3倍多く見られた。平均年齢は45.4歳。受診までの期間は平均7.4日。

WBC数の平均は7960(4200～13500)。全経過は平均22.2日。症状については、いわゆるstaccatoやrepriseはみられず、他の「治りにくい咳」の患者と変わりなく、かぜ症候群の咳とも区別が付きにくいものだった。

- 4 今後は、このような成人百日咳の病態をよく理解して、早期に適切な診断・治療が行われることが必要である。
- 5 「成人百日咳」は小児科領域のみならず、内科領域においても、市中感染症の原因疾患として重要と考える。

以上です。